

Title	西洋史詳説(内藤智秀著, 帝國書院刊)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.2 (1938. 11) ,p.190(336)- 191(337)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0190

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

此の墓を發見せんため好んで臨時の墓地管理人となれたことなので序でながら一言の説明を加へておく。また同記事に文倉氏の名を平三郎と記して居るのは、本書中他の機會に氏自ら語られて居るところによると、それが氏の本來の名であつて後に戸籍面の誤記のため平次郎とかはつたのだと云ふことであるから之も餘談ながらつけ加へておくでしょう。

さて最後に文倉氏の研究の努力について述べるわけであるが、それは明治三十一年から今日之が完成するまで實に四十年の歳月をよみして居るといふ點からも恐らくその推察はつくと思ふが、しかし筆者は勿論それを歲月の長短のみから決定するつもりでは斷じてない。それよりは寧ろ同氏が研究上極めて不遇と思はれる古河鑛業會社の一社員と云ふ立場に身をおきながら、而も終始研究を續けられたといふ點に於いて深く敬服するもので、之を思ふとき假令本書に多少の缺點はあらうとも、また事實資料の引用などには如何にも覺束なげな跡が見られもせぬではないが、夫れを口にするまへに先づ一應の敬意を表せずには居られないのである。筆者は曾つて或る會席にて偶然文倉氏と一座したことがあるが、その瘠身瘦軀の中に斯うした大業の祕んで居たことを思ふと白髮のその非常に靜穩なりし面貌に一閃の或る輝きをさへ感ずる。(菊判總頁七九二頁)(會田倉吉)

西洋史詳説 (内藤智秀著) (帝國書院刊)

本書は同氏の外國歴史(西洋之部)を教科書として教授する際

の教師用參考書として編まれたものであるが、非常に親切に且つ巧妙に出來てゐる。太古から大戰後の世界に至るまでを三百五項目に分け、これに三百五十三箇の註と參考書が添えてある。本文だけ讀めば樂に西洋史の全般に通ずることが出來、註だけ拾つて讀んでも中々興味ある事實が覺えられる。單に教師用として有益であるばかりでなく、一般讀者のためにも、又上級學校の受験參考書としてもよく、又高等學校程度の西洋史教材として使用することも出來て頗る便利である。試みにその註の一二を左に引用して見やう。

チギリス・ユウフラテス雙子河沿岸風光 チギリス (Tigris)

は矢を意味し、ユウフラテス (Euphrates) は大河を意味するが、其の下流地方バグダッド以東は河口まで三七五哩間僅に約百呎の傾斜を有するだけであるので下流の流れ極めて緩である。隨つて下流地方の沿岸には肥沃の土地多く棗椰子 (Date palm) を始め穀物類の繁茂が多く、北緯三十度内外であるので熱帶的な植物も尠くない。殊に多く茂る棗椰子はその實は住民の常食となり、葉は屋根を被ひ、皮は繩又は織物衣類となり、そして幹は家屋の柱となつて正に吾が國の稻にも當るのである。

ケマル・アタチュルク (Kemal Atatürk 1881—) ケマルはム

スタファ・ケマル (Mustapha Kemal) と云はれケマル・パシヤ (Kemal Pasha ケマル閣下の意) と呼ばれ又ガデー・パシヤ (Ghazi Pasha 常勝將軍の義) と云はれたが、最近(一九三四年)家名を稱へる様になつて自ら「トルコ人の祖」と云ふ意味でアタチュルクと稱するに至つた。彼は一八八一年サロニカの

市民の子息として生れ其の地に育ち後首都の士官學校に學んだ。一九〇四年には青年トルコ黨の前身に加はり、一九〇八年青年トルコ黨の革命に参加し、世界大戦前にはブルガリヤ、ドイツ等の在外武官として活動した。大戦中はガリポリの戦、メソポタミヤの戦に功を樹て、戦勝國の侵略政策に反對し武装闘争を指導し、一九二〇年セーヴル條約に於けるトルコの屈辱を憤慨し國民黨を組織し帝政を倒して共和制を敷いた。自ら選ばれて第一回大統領となり爾來今日に至るが、トルコ國民崇拜の的である。一時ラテ・イフェ・ハヌム (Latife Hanum) と結婚したが、三年の後は離婚して獨身で通してゐる。希土戦争に勝つて後は一九二三年ローザンヌで近東平和條約を結び、帝政廢止、回教主廢止、ローマ字採用、トルコ帽禁止等大改革を斷行し、政治家として武人として社會改革者として又アジャヤ人として多くを期待されてゐる。彼の内政上の標語は道路の開發、産業の發展、教育の振興にあつて之が實行の爲めに常に努力してゐる。(四六版索引共五四四頁。定價三圓)(間崎万里)

シーボルト研究

(日獨文化協會編
岩波書店刊行)

文政六年、長崎の和蘭醫官として來朝したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトについては今更言ふの要はない。「鳴瀧(長崎市外、シーボルトの診療所兼學塾)は歐洲の學術を信奉する日本人の集合所となり……その一小地よりして科學的開發の新光明が四方に放射した」との彼自らの懷想が最も良く彼の残した歴

史的役割を物語つてゐる。

昭和十年四月上野科學博物館内に開かれた「シーボルト資料展覽會」は資料の蒐集の周到なりし點で正に劃期的な企てであつた。自分もその際數多くの珍奇なる史料に眼を瞠り、就中かの間宮林藏の勞作、内閣文庫所藏「唐太圖」「日本圖」の前に到つては、これがかのシーボルト事件の發端となつたかと思へばその結末の悲惨なりしに思を馳せ低徊去るに忍びなかつた。

その後、右展覽會に資料の蒐集せられしを機とし、專攻の學者十數氏に依つてそれらの角度よりシーボルトの研究が遂げられ編み纂めて「シーボルト研究」と名づけ日獨文化協會の手によつてこの程刊行せられた。

輯る所の論文十三、多くは言語學者として就中アイヌ語研究者として、醫學者として、動物學者として、地理學者としてのシーボルトを論じたもの、他に教育者としての面に及んだものに黒田氏、彼の第一回渡來の使命より彼の日本研究特に日蘭貿易の檢討につき論じた板澤氏、があり、更に門人がシーボルトに提作したる蘭語論文に關する四氏の分擔研究等今之等に一々言及するの暇を有しないが孰れも史料に即した着實な研究であることを喜び度い。

附録に日本に於けるシーボルト書目を附し、亦隨所に貴重なる史料寫眞を挿入されて學者シーボルトに對する贈物とするに相應しい學的良心に満ちた論文集となつてゐる。

終りに黒田氏の論文の末尾を抄つて再び在天のシーボルトに思を馳せよう。